

## 入賞作品

### 十二段トンネルと私

加藤 茂行

早朝五時三五分、阿仁合発一番列車。雨の日も雪の日も大館の高校へ通う私を運んでくれたのはC11型蒸気機関車だった。まさに「ガッタンゴットン」の心地良いリズムが一日のスタートだったと高校時代のことを思い出す。当時の名称は国鉄阿仁合線で阿仁合駅は終点であったことから機関車の向きを変える転車台も懐かしい。

あれから六十余年経過した今、阿仁合線と角館線は平成元年（一九八九）に接続され、秋田内陸縦貫鉄道となって県北と県南を結ぶ生活路線となった。そして風光明媚な四季折々の景観の中をまるで秋田の背骨を縫うように走り、沿線住民の重要な足となって存在感を示している。

現職のころ、出張や旅行の機会が多くあり、秋田新幹線と繋がる利便性から秋田内陸線を利用するのが常だった。

車窓から見える集落のたたずまいはもとより稜線や川の流れをながめながらの旅は本当に心休まるひと時である。

景色は真つ暗になるが私にとって一番大切なのは十二段トンネルを通過する数分間なのである。トンネルが貫通した当時の小畑勇二郎知事をはじめ沢井作蔵阿仁町長、そして柴田十郎角館町長らの歓喜に湧いた様子の記事を思い出す。また、関西へ

の旅の折、秋田内陸線酒井一郎元社長と同じ列車で上京する機会もあった。阿仁合駅から上野まで行くという酒井社長は席が空いているのに座席に着こうともせずいた。十二段トンネルに差しかかるころ、私は酒井社長に話しかけるきっかけを作るためデッキへ行き、「全国私鉄甲子園」を秋田内陸線主催でやったらどうかなどなげかけてみた。社内で話題になったかどうかは不明のまま酒井社長は退任された。

さらに、とてつもないことだが、「秋田の山手線」の発想は秋田内陸線が全線開通して間もない頃、はじめて十二段トンネルを通過したときに思いついたことである。

「阿仁合発秋田經由阿仁合行き」「阿仁合発盛岡經由阿仁合行き」が実現したら楽しい列車の旅ができるのではないかなど夢のようなことも十二段トンネルが教えてくれた。

大正十一年（一九二二）四月に鷹角線構想が立ち上げられてから、第二次世界大戦、国鉄民営化、人口減、オイルショックなど様々な要因で構想が立ち消えそうになった中で、県や沿線住民の熱意により秋田内陸縦貫鉄道が誕生したことは県民の大きな喜びである。

そして今、鷹角線構想が立ち上げられてからちょうど百年目を迎える意義あるときに、秋田内陸線を愛する一人としてエッセイコンテストに参加できることは、この上なく倅せなことである。これも不思議な力を私に与えてくれる十二段トンネルのおかげと思っている。